

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」  
2012年度第4回研究会（通算第4回）

日時：2013年2月3日（日）13:00～19:00

場所：本郷サテライト7階

- 1) 石田慎一郎（AA研共同研究員、首都大学東京）  
「おそろしい隣人：ケニア・ニャンベネ地方40世帯10年の事件簿」
- 2) 溝口大助（AA研共同研究員、東京工業高等専門学校）  
「フランス語圏西アフリカ民族誌研究の起源と展開」
- 3) 小西公大（AA研共同研究員、東京外国語大学）  
「インド・トライブ研究における言説空間」

#### \*概要

今回の発表は石田慎一郎さん、溝口大介さん、小西公大さんによる発表だった。石田氏は、「紛争処理・犯罪解決における地域とはなにか？ケニア・イゲンベ農村から」は、法人類学の立場から人類学の空間構想力を考えたものだった。長老裁判や近代法がいわば集団の規範による裁定として措定し、その対局として宣誓という形での裁定をオールタナティブ・ジャスティスとして捉え、これが成立する地域社会を事例として分析することは、どのようなレベルでサンプルとしての意義をもつかを考察する大変刺激的なものだった。溝口氏の発表は「フランス語圏西アフリカ民族誌研究の起源と展開」とし、現在の日本の西アフリカ民族誌という研究対象の設定が、フランス人類学の制度的背景と密接に結びついていることを丁寧に解きほぐしたものだった。最後の、小西氏の発表「部族」をめぐる言説空間—大塚人類学における「部族」論の紹介とその意義」として、大塚和夫氏の人類学研究史を、「部族」の観点から捉えると共にインド研究における「部族」を接合する取り組みだった。いずれも刺激的で力のこもった発表であった。これらの報告をうけた全体討論によって、本共同研究の方向性が、大きく三つ「地域人類学の研究史」「人類学者による空間構想力」「大塚人類学の再考とその可能性探求」に分けられることで合意した。そして今後はその方向を発展させつつ三つのつながりを考

察していくこととなった。また来年度は前期に、未発表のメンバーによる発表を行い、後半には共同研究の成果とりまとめにむけての総合討論の回を設けた上で、その後の計画を決めることとした。

\*各報告要旨

紛争処理・犯罪解決における地域とはなにか——ケニア・イゲンベ農村から

石田慎一郎

本発表では、イゲンベ民族誌にかかわる5つのレベルの地域性を指摘し、それらを地域Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの3つの次元でとらえた。地域Ⅰ（①民族誌的地域性）は顔が見える場としての地域であり、②③④のミクロコスモスとしての地域である。地域Ⅱ（②行政的地域性、③生態学的地域性、④民族境界的地域性）は社会的事実を記述する次元の地域である。地域Ⅲ（⑤理念的的地域性）はオルタナティブな〈社会〉学が求める理念としての地域（ローカリティ）である。本発表では、イゲンベ農村の紛争処理・犯罪解決において民族誌的地域が社会的事実としての地域、理念としての地域を引き受ける（地域固有かつ地域指向の紛争処理が機能する）ということがどういうことなのかについて、いくつかの事例をふまえて考察した。

フランス語圏西アフリカ民族誌研究の起源と展開

溝口大助

本発表の目的は、第一に、現代のフランス語圏西アフリカ研究に特徴的な議論のいくつかを概略し、第二に、フランス「民族誌」学の起源に遡りつつ、パリ高等研究実習院（Ecole Pratique des Hautes Etudes :EPHE）第五部門宗教学セクションとは異なる視座でデュルケム・モースの宗教学・社会学が展開していったプロセスのあらましを提示し、第三に、この新たな学問領域で生まれた言説の影響下で西アフリカという「地域」をめぐる「民族誌」という手法を用いた記述の方法が確立していく経緯を紹介することにあつた。とりわけ、1925年にレヴィ=ブリュル、マルセル・モースによって創設された民族学研究所、更に、1931年にマルセル・グリオールが組織化したダカール=ジブチ調査隊によってアフリカの東西をまたいで展開された広域調査の成功は、それ以前の「民族誌」記述のスタイルを大幅に変えた。結論として、新たな学問領域と制度化の過程から、植民地行政官モーリス・ドラフォッスの記述スタイルの意図的な忘却に代表されるように、初期西アフリカ民族誌における三つの断絶と連続（アラビア語文献学、言語学、イスラーム歴史研究）がそこに存在する点を指摘した。

「部族」をめぐる言説空間—大塚人類学とインドにおけるトライブ研究との接合可能性

小西公大

本発表の目的は、一つには、大塚和夫による部族概念にまつわる知の変遷を概観するとともに、その時代の知的潮流と重ね合わせながら「部族」をめぐる「言説空間」を捉えること、もう一つは、インドにおけるトライブ研究の系譜を紐解きつつ、部族論をめぐる大塚の主張と重ね合わせることで、双方の接合可能な領域を模索する、というものであった。大塚人類学における部族論は90年代以降に集中して発信されたものであり、初期の広範な事例を用いたグランドセオリーの探求から、中・後期における民族誌データや史料を用いた微視的な調査報告まで多岐にわたっている。「部族」をめぐる議論は、多様な人類学的理論を駆使しつつ、周辺に配置された「民族」や「宗派」等の語彙との差異を模索していく中で、2000年代に近づくにつれて明確な主張となっていく。あくまで「部族」概念にこだわり続けた彼の主張と、インドにおける「トライブ」をめぐる言説空間は、一方で双方同様の構築主義的な解釈を許容しつつも、他方でその指し示す「実体／実態」に明確な差異がみられた。本発表は、比較の視点によって得られた「部族」／「トライブ」にまつわる論理の差異に注目し、これからの部族論のあり方を模索するための一助とした。